

NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル 2階

(株)毎日学術フォーラム内 TEL. 03-6267-4550

No. 54 2009. 3. 16

理事長挨拶

理事長 宮田 敬一

(大阪大学大学院人間科学研究科)

早いもので、もう桜のたよりがきかれる頃となりました。昨年のいわき明星大学での第54回大会には多くの参加者があり、おかげさまで成功裡に終わりました。吉川吉美大会長をはじめとして、大会運営のスタッフの皆さんに感謝申し上げます。

いわき大会では、成瀬悟策先生と内藤いづみ先生の対談をお聞きし、生と死の問題を考えさせられましたし、また、終末医療におけるペインの問題に催眠が今後、大いに役立つのではないかと感じました。このような医療分野における催眠の臨床適用のためにも、いっそうの基礎的な催眠研究も同時に期待されています。

幸い、最近の催眠技法研修会においては、実験催眠に関するコースが設定され、これまでの催眠研究や催眠実験のしかたについて、若い研究者が参加するようになってきています。特に催眠の指導者のいる大学においては、催眠研究の活性化が大いに期待されています。先の大会での演題数は主催校のご努力にもかかわらず、全部で9つ程度であり、実験に関するものは極端に少なくなっている状況です。ただ、催眠の研修会は東北、福岡、鹿児島などで、継続的に、しっかりと行われているだけに、今後、催眠研究会の動きも活発になることが期待されます。地区の催眠研究会には学会からの助成制度もあります。研修会と研究会がリンクして、研究テーマにそった研修会の開催も考えられます。そして、地区での催眠研究が学会でのシンポジウムの開催や学会発表と結びついていくことが望まれます。

いわき大会での講演で言及しましたが、私は、人の主体性には仏教でいう能(active)と所(passive)の両面があり、この能所は心身一如と同様に、一つであり、二つに分けられないものと考えられています。個人内での能所という調和、たとえば、イメージ中に出現している能動的で動の自己像と、そのイメージを見ている受動的で静の自分との自己システム内における調和だけでなく、個人と環境の間の能所、つまり、能動的に環境に関わっていく自分と、逆に環境から関われる、受け身的な自分の両面がうまく調和しているときに、人はまわりとの一体感とかフィット感をもつのではないのでしょうか。催眠が心理学、医・歯学、社会福祉、教育というそれぞれのワールドの中で調和的に能所としてうまく互いに相互作用していく、フィットしていくことを信じています。

新年度の55回大会は、飯森洋史先生を大会長にして東京(本郷)で開催されます。演題が多くなり、活発な議論がくり広げられることを期待しています。本郷でお会いしましょう。

大会を終えて

第54回大会 大会長
吉川 吉美 (いわき明星大学)

催眠医学心理学会を終えて、一年間背負っていた重い(?)肩の荷を降ろすことができ、実行委員会一同「ほっと」しています。開催地のいわき明星大学は東北の玄関口に位置しているとはいえ交通のアクセスが悪く、またいわき市の知名度が低く、果たして大会の参加者が集まるのかが最大の心配でありました。実行委員会を立ち上げた時、大会テーマをどうするかと言う議論を行う中で「こころ」と「身体」の関係、一体性とその挟間の深みを探ろうということになり、「催眠 心身一如の再考」というテーマで行こうということになり、ワークショップ、対談講演、理事長講演、シンポジウムを企画しそして研究発表を募集した。ワークショップでは佐々木雄二先生による自律訓練法実習、斎藤稔正先生による催眠研究の現在、吉川による催眠誘導を考える(臨床動作法における催眠学的知見から)を行いました。対談講演は、「生きているということを考える」というテーマで鶴光代先生の司会で本学会の長老、成瀬悟策先生に登場していただき、在宅ホスピスの草分け的存在である山梨県甲府のふじ内科クリニック院長、内藤いづみ先生と熱い対談をしていただいた。この対談は一般市民にも公開し好評を得ました。そして宮田敬一理事長には、「催眠ブリーフセラピーの可能性」と題して講演を頂きました。そして最終プログラムとして「催眠の発展を探る(心身一如の観点から)」というテーマでシンポジウムを行いました。司会は福島学院大学の星野仁彦先生、シンポジストは、新日鐵八幡記念病院の松原慎先生の「医療の現場から(心身統一から心身調整へ)」、大分大学の田中新正先生の「心理臨床における催眠体験」、福島大学の白石豊先生の「ヨーガセラピー(そのスポーツへの応用)」で発言をいただき、それを受けて指定討論者の京都大学名誉教授藤原勝紀先生に討論をしていただきシンポジウムを発展し深めていただきました。これらの全ての企画が期待していたように、いや期待以上に成果が得られたとスタッフは大満足しています。また会期まで研究発表の申込み状況の推移に期待と不安と焦りが入り混ざりハラハラしていましたが、皆様のご協力のおかげで、何とか演題も集まり「ほっと」しました。ご協力頂いた先生方にこの場をおかりして感謝します。大会前日に開催された研修会にも多くの人が参加され研修をお受けになりました。ところで今回冒頭でも述べましたようにいわき市の知名度は、東北地区では東北の湘南と呼ばれる(?)位、名は

知られていますが、全国的には知られてはいません、そこで今回はポスター等での宣伝にかなり力を注ぎました。勿論、本学会の名称も当然アピールしました。最後の決め手としてプロのフラガール(スバリゾートのフラガール)さん5人にも来ていただき懇親会を盛り上げていただきました。最後に大会を終えて思う事ですが、やはり催眠と言うとまだまだ偏見視する人達が身近にいることを再認識いたしました。これは我々会員が、こう言った問題がまだある事を認識した上で、ある意味で闘って行かねばならないと痛感しました。

研修をふりかえって —「サンセット」というギフト—

林 真一郎 (和光大学)

私にとってたいへん豊かな体験であった。森山敏文、阿部真理子、松木繁、長谷川明弘の諸先生方の技を順に拝見できる有り難さを味わいながら、今回は特別のギフトを頂戴できたと思う。それは松木先生の腕下降のデモンストラーションを核とした一連の体験であった。

デモは3名の受講者に対して同時に腕下降を行うもので、私はその3名のうちの1人として手をあげた。イスに腰かけた際、お腹の前で両手を組んでいたことから、松木先生は「これからの体験への防衛があるものの、いったん入ってしまえば深く集中できるかもしれない」との見立てをされた。実際そのような展開で、最中に私が体験したのは、注視していた右手の中指の先がやや光を帯びた円弧のように見え出し、それがぼんやりした背景の中でゆっくりと沈みゆく夕日のように感じたことだった。そのことを事後に報告すると、松木先生から「夕日、つまり『サンセット』ですね。ちょうど手を組んでいたように何か収束していく」とコメントされた。その後、川嶋新二先生とペアを組ませていただいて腕下降の相互の催眠を続けた折も、川嶋先生から「これまでの3回の腕下降の体験をまとめると、どんな感じがしますか?」という問いかけをいただいた。今思い返すと、川嶋先生もきっと何かを察知されて、そのような投げかけをしてくださったのだと思う。それが私の中でヒットし、先ほどの松木先生のギフトとミックスされ、この一連の体験がインテグレートされて、『サンセット』は、今の人生のある局面の本質的な何かを表しているのでは?との思いもよらなかった深い洞察への扉を開いてくれたのだった。

では、その「何か」とはいったい何だろうか? 「sunset」の「set」を辞書引きすると、自動詞として「没する、沈む、

衰える、消え去る、おさまる、定まる、固まる」との語意が出てくる。勤務する大学の研究室にある小さなパキラは十数年生きてくれたが、いわきから帰ってから、ほどなく枯れて終わった。自宅のパソコンは老朽化して処理速度も落ちているので、もう終わりが近いかもしれない。そんな身の回りの現象が連想される。しかし、私の内面で思いあたるもっと重要なことがあるのだ。それは数年来にわたって人生の大きな一章を画するような体験だ。ずっと終わらせようとして、終われなかった「それ」が終わろうとしているのだろうか。

腕下降の後、ペアを変えて腕浮揚をやったが、私の左手は上がらなかった。無意識層では上げたくないと考えているらしい。そもそも利き腕でない左手を選んだ時点で、上げないことを意思表示していたようなものだ。「終わる」プロセスを十分に体験する必要があること、だから「始まる」局面をまだ迎えていないだろうことに気づかされたのだった。

研修が終わった後も、洞察の作業は続き、大会最終日のシンポジウムに向かう途中、いわき明星大学のキャンパスから眺めた夕日に、ふだんとは違った感慨を抱きながらカメラにおさめたりしていた。その後、熱海の温泉に独り浸かっていたときに、ふいに昔の大河ドラマ「黄金の日々」のオープニングの曲を映像とともに思い出した。フィリピンのルソン島の巨大な夕日が沈んでいく光景だ。「ああ、終わっていきんだらうなあ」としみじみと感じ、ほんの少し涙が出た。

このように「サンセット」というギフトが新たな気づきや洞察に導いてくれた。単に催眠を感覚で体験するだけでなく、催眠の操作者から与えられた言葉に助けられて、一連の体験を統合したり、洞察の切り口を開いたりといった思考をも駆動されることになった。それは事後の作業に及ぶほどの大きな贈り物となったのであった。



第54回大会印象記および第55回大会について

第55回大会 大会長

飯森 洋史

(国際心理社会実存医学研究所・飯森クリニック)

「催眠一心身一如の再考」という大会テーマで、第54回大会は吉川吉美先生を大会長として、いわき明星大学にて平成20年11月1日から3日にかけて催眠技法研修会と学術大会が開催されました。「印象は」と聞かれた時、やはりなんとといっても「海の幸」がおいしかったことが一番です。お土産に買って帰った「ねりうに」もとても美味しく、東京に戻っても幸せな気持ちになりました。しかし、「いわきは遠かったなあ」と感じ、色々と地方出張の多い吉川先生はいつも大変な思いをされているのだな—と思いました。

初日の研修会は、松木繁先生のアシリテーターとして中級コースへ参加しました。3人一緒に誘導した時のそれぞれの被催眠者の反応の違いに注目することは、観察眼を養う上でとても役に立つという経験をさせて頂きました。事例検討は「社会不安障害に対する催眠療法的アプローチ」という演題で金沢工業大学の長谷川明弘先生の発表でした。社会不安障害の催眠について発表した筆者にとって、興味を持って参加しました。しかし主訴が書かれてないのはおかしい、診断は初期統合失調症ではないか、解離性障害ではないか、イメージ訓練と催眠とは違う、解離催眠はしたかなどたいへん厳しい意見も多く出ました。結果的には認知の変容と緊張の低下がみられ治療は成功したので、長谷川先生の直向きな姿勢を評価する意見も出ました。

2日目の学術大会はワークショップと対談講演でした。ワークショップは選択を間違え、自律訓練法を選んでしまいました。自律訓練法をほとんど知らない人には良かったと思いましたが、私にとってはほとんど知っている事ばかりだったので激しい睡魔に襲われました。直前に、催眠学研究の現在に変更したいと申し出たのですが、後に空席があったにも関わらず、運営上絶対にだめと言われ、その柔軟性のなさががっかりしました。対談講演は内科医の私にとっては周知のことで、これが何故催眠医学心理学会のテーマなのだろうと疑問に思いました。2日目の学術大会は研究発表、理事長講演、シンポジウムでした。研究発表は演題数が少なかったこと、発表が3会場に分かれていて聴きたい演題が重なってしまったことなどが問題点として挙げられると思います。理事長講演はとても興味深い内容でしたが、配布資料が欲しかったのと内容理解にはもう少し時間が欲しかったと感じました。シンポジウムは松原慎先生が随分と頑張られて発表されていました。心身医学

における催眠の位置づけと過敏性腸症候群について発表されました。大和言葉の身体言語については大変興味を持ってました。田中新正先生の心理臨床における催眠体験は話としては面白かった面もあったのですが、現場の匂いが感じられませんでした。白石豊先生のヨーガセラピーも興味がそられる箇所がありましたが、催眠との関連性の視点が足りない感じられました。

こうやって第54回大会を独断と偏見で振り返ってみると、随分と厳しい評価となってしまいました。失礼な発言となってしまった箇所もあるかと思いますが、私の「ひとりよがり」な感想ですので、どうか聞き流して下さい。今回、関東方面で他に現在できる人がいないので、私が第55回次期大会の大会長をやるようにと関係各位から仰せつかり引き受けたのですが、おまえはちゃんと準備できるのかと問われると、不安を感じる面も多々あります。とにかく一生懸命やるしかないというのが現在の心境です。

第55回大会は水道橋の東洋学園大学を会場として、平成21年11月20日から23日まで開催の予定です。11月20日はキャサリン・ダイチ先生の情動調整に関する特別ワークショップ、22日にはダイチ先生の講演と事例検討を予定しています。「情動調整と催眠」(仮題)を基本テーマとし、これに関係するシンポジウム、私は心療内科医であるので、心療内科領域の催眠についてのシンポジウム、その他、色々と新しい企画を検討中です。目標は精神科領域、心療内科領域、看護領域等、医学領域の幅広い結集と、臨床心理学領域と教育現場領域の幅広い結集による、会員数の増加に繋がるような、行って見たいと思うような学会になる様に最大限努力しようと考えています。また演題数の増加は学会の発展には必須の命題ですが、ひとえに皆様のご協力なくしては実現しません。宜しく御願い致します。



編集委員会からの報告

編集委員会 委員長

田中 新正 (大分大学)

催眠学研究 50 巻 1 号記念特別号を昨年 10 月にやっと発行することができました。学会誌 50 巻記念号ということで、催眠研究第 1 号の発行責任者で名誉理事長の成瀬先生に「特別寄稿」をお寄せいただき、それと第 1 号掲載論文の一部を紹介しました。そしてわが国の約半世紀にわたる催眠研究の歩みを検索できる、催眠学研究 第 1 号から第 49 巻 2 号までの総目次と著者索引・事項索引を掲載しました。今日でもとても参考になる研究が、多くの先達により行われてきたことが伺えます。会員の皆さんのこれからの研究活動に是非活用して頂きたいと願っています。論文の詳しい内容は、新しい学会事務局の毎日学術フォーラムでバックナンバーにより調べることができます。

なお第 50 巻 2 号も 12 月末には、お手元に届いたと思います。2 号には、昨年の学会中にご逝去されました大野清志先生の追悼記を掲載しました。

ところで第 50 巻は本来なら 2005 年に発行されるべきで、現在 3 年の遅れが生じています。これまでは合併号を出さない計画で進めてきましたが、これまでの遅れを解消するためにはもはや合併号を出さないわけにはいかない状況になりました。それで今年度は、3 月末に第 51 巻 1・2 合併号を発行予定です。そして平成 21 年度は、第 52 巻と第 53 巻を発行して遅れを解消する予定です。

この計画を達成するためには、会員の皆様からの論文投稿の協力が不可欠です。どうか昨年の大阪大会と、今年のいわき大会で発表された方を始め、会員皆さんの積極的な投稿をお願いします。

広報委員会からお伝えしたいこと

広報委員会 委員長

森山 敏文 (広尾心理臨床相談室)

今期の広報委員会の活動として、各委員によるニューズレターの編集担当制を導入した。会員への学会及び関連情報をお知らせしていくという、主たる役割は当然としながらも、編集担当者による「企画」及び編集をして戴くことで、会員にとって少しでも興味や関心を抱かれるような紙面作りを目指したいと思う。このようなことで、紙面作りにおいては、伝統的なものは大切にしながらも、紙面に編集担当者の風合いが出ることを期待している。既に前号(53号)は、長谷川明弘委員の担当として公刊している。今号は、

中島央委員に担当して戴いた。今後も各委員に順番制でお願いしていくことになる。

ニュースレターは、年に2回の発行を目指しているが、とても残念なことに、昨年は、長い間つくば大学に置かれていた学会事務局の「移転」があり、外部機関として「毎日学術フォーラム」に仕事を委託するなどの、大きな変更があったために、事務機能上の混乱が生じて、発行に至るまでに手間取ってしまった。結果、年内には1回の発行となった。広報委員会の責任者として、あらためて会員の皆さまにおおびしたいと思う。

さて、昨今は、メディア・テクノロジーの展開によって、個人がコンピュータを所持し、これを活用する機会が圧倒的に多くなったといえるが、学会のホームページも、その利用を見込んで、随分と以前から Web 上に公開している。そこでは、学会開催や研修会情報に関連して、ニュースレター上の情報伝達では間に合わないものについて、ホームページを活用している方々に少しでも早めにお知らせが出来るように工夫している。

勿論、ホームページ上に公開している情報は、広く会員以外に対する広報の意味も含まれているので、会員用のニュースレターとは質・量とも異なり、全く同様のものではない。会員に対しては、情報における質・量の不足の一部を補うように（公開という性質のため会員にとって重要度の高いものは除かれることがある）、非会員には、学会及びこれに関連する諸活動の紹介が主な役割であろう。

何れにしても、これまで以上に、今後の情報伝達の主軸になるであろうから、ホームページ上の工夫をしていきたいと考えている。しかし、ホームページの拡充及び運営に伴う予算やホームページ上の管理（セキュリティを中心とした）などの問題があり、これらが今後の課題となろう。現在は、渡邊浩司委員に、運営上の協力を得ている。何分、あくまでも専任の仕事ではないので、つとめて大禍のないようにしたいが、もろもろのトラブルを見込みながらの仕事となろう。何卒、ご容赦の程を。

もうひとつ。広報が、研修会や研究会の情報を扱うばあいには、会員から戴いたすべての情報を吟味無く掲載することは、公的な意味合いの大きい刊行物の性格上、難しい。可能な限り多くの多様な情報を寄せて戴き、これらを載せていきたいが、一方「公刊物」としてのセキュリティを考えると「必要な制約」というものがある。このあたりのことも、広報活動における今後も続く議論の対象であり、課題である。広報委員間の十分な議論を踏まえた上で、そう遠くない内を目指して「掲載基準」について明文化するための作業を始めたいと考えている。

委員会報告

企画・教育委員会、研究委員会 委員長
松木 繁（鹿児島大学）

今期の企画・教育委員会ならびに研究委員会では、副委員長の長谷川明弘先生、井上忠典先生の協力を得ながら、研修会の充実を目標に活動を行っています。

今年度の活動として、学会主催研修会は一昨年に続き、年2回のペースで行うこととし、第一回目は昨年7月20日（日）に東洋学園大学本郷キャンパスにおいて、第二回目は11月1日（土）午後～2日（日）午前にかけて、いわき明星大学にて開催された第54回大会期間中に開催しました。両方の研修会ともに若い世代を中心に参加者が多く盛況で、第1回目などは定員を越え、急遽、講師を増やさざるを得なくなるといううれしい悲鳴をあげるほどでした。研修機会が増えるに従い、参加者の意欲の高まりが感じられるようになったことは催眠の活性化へ向けた動きが加速してきたものとして、企画・教育委員会としても嬉しい限りです。

さらに、研修企画についても、これまでの研修会でのアンケートをもとに検討を加え企画内容を「催眠の臨床適用」、「催眠の実験・基礎研究」、「催眠実践の倫理」という3つのテーマを中心に掲げて行ってきました。「催眠の臨床適用」については、多くの会員からの「催眠誘導はできるようになったがそれを実際に適用する具体的な方法の研修を受けたい」という声に応える形で研修内容を組み立ててみました。また、研究委員会からの提言を受けて、「催眠の実験・基礎研究」についても研修機会に組み込み大変好評でした。「催眠実践の倫理」については、これまでも行ってきたテーマではありますが、研修の活性化が進む時こそ最も重要なテーマとして置いておかねばならない点として強調していくこととしました。研修機会の増加と研修内容の充実により、確実に参加者が増えていることを実感しています。

一方、今年度は、第27回心理臨床学会大会に伴うワークショップ（2008年9月4日、つくば国際会議場）にて、『催眠と心理療法 — 催眠誘導技法から学ぶ心理臨床の“コツ” —』と題し、本学会所属の学会認定指導催眠技能士4名による催眠誘導技法の実習指導が行われました。指導は、田中新正（大分大学）、吉川吉美（いわき明星大学）、森山敏文（広尾心理臨床相談室）、松木繁（鹿児島大学大学院）の4人で行いました。こちらも定員オーバーの盛況で、臨床心理士の中にも関心を持つ人が多いと感じました。また、地方研修会も活発になり、福岡催眠療法

研究会の活発な活動ばかりでなく、今年度から新たに「鹿児島臨床催眠研究会」も立ち上げられ、その第1回大会が催され活動を開始し始めています。東京等、他地区においても立ち上げの準備が進められています。

このように、研修会は充実してきたように思いますが、経験者のための上級コースの企画の充実が今後の課題として必要だと考えています。特に催眠技能士および指導催眠技能士資格取得後の研修機会・研修指導機会の確保と研修内容の検討を進めていく必要があると考えています。尚、21年度の研修は以下の通り開催・予定されています。奮ってご参加下さい。

1. 学会主催研修会

1) 平成21年度第1回学会主催研修会

日時：平成21年7月26日(日)

場所：大阪大学

2) 平成21年度第2回学会主催研修会(第55回大会)

日時：平成21年11月21日(土) (予定)

場所：東洋学園大学本郷キャンパス

2. 日本心理臨床学会ワークショップ

日時：2008年5月31日(日)

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス

3. 地区研修会

1) 鹿児島臨床催眠研究会第2回研修会

日時：2008年3月1日(日)

場所：鹿児島大学総合教育研究棟

2) 福岡催眠療法研究会

日時：2008年3月20日(金)～22日(日)

場所：九州大学発達臨床センター

国際交流委員会からの活動報告

国際交流委員会 委員長
長谷川 明弘(金沢工業大学)

今回の報告で最初に取り上げたいのは、国際催眠学会(<http://www.ish-web.org/>)に入会したことです。国際学会への入会なんて、自分には関係なくまた無理と考えていましたが、手続きを踏んでみると意外と簡単にできました。クレジットカードでの支払いが可能ならば、安全なサイトに繋がり手続きを進めることが出来ます。引き続き、この学会への入会を会員のみなさんに呼びかけます。

関連する情報として2009年9月23日から26日まで

国際催眠学会 International Society Hypnosis の第18回国際大会がイタリアのローマにて開催されます(なお大会前にワークショップが9月22日から23日まで開催されます)。大会テーマが催眠と神経科学(Hypnosis and Neurosciences: clinical implications of the new mind-body paradigms)となっています。参加の申し込みやプログラムの詳細は、WEB(<http://www.hypnosis.it/Inglese.html>)で確認できます。なお大会への参加は国際催眠学会の会員である必要はありません。現在国際交流委員の中から国際催眠学会への大会参加を検討中です。会員の方で同行希望の方は、末尾まで問い合わせください。

2009年11月下旬に開催される次期大会の準備が飯森洋史先生を中心に始まり、宮田敬一先生が海外からの講師招聘への協力をされているときいております。また窪田文子先生が8月半ばに米国のボストンであったAnnual convention of American Psychological Associationと11月初旬にフランスのパリであったInternational body psychotherapy conferenceに参加されたときいております。

会員の皆様、情報や問い合わせなどございましたらいつでも hasegw_a@neptune.kanazawa-it.ac.jp まで連絡をお待ちしております。

倫理綱領について、その意義と課題

倫理委員会 委員長
鶴 光代(跡見学園女子大学)

会員の責任と社会への宣言

医学や心理学に限らず、物理学や工学その他諸学問領域で、関係団体は倫理綱領を設けている。倫理綱領は、その団体の存在価値を明確に掲げ、会員がその実現に向かう際にあるべき姿を提示するものといえよう。

本学会では、前文において、「(本会は、)「催眠の科学的研究の進歩とその臨床的利用の拡大に寄与しようとするものである。本学会の会員は、これらの目標追求のために、専門的活動を行おうとするさい、この倫理綱領に従わなければならない」としている。

ここに示されていることは、会員に向けてと同時に、社会に向けての提示である。倫理綱領は、会員が自身の倫理的センスを向上させ、倫理的意志決定において非倫理的になることなく行動を行うための指針となっている。その一方で、本会は倫理綱領をHPに公表することで、社会にむけて、価値ある活動を目指す団体であり、倫理的に責任ある活動をしている団体であることを宣言している

のである。

倫理綱領の実際と問題

倫理綱領の1.では、被験者やクライアントの人権を守るために最大の努力をすることとある。続いて、2.では、被験者やクライアントの安全確保に責任をもたなければならないこと、そして、3.では、「個人的情報を守秘する義務」を述べている。これらは、当然のことと受け取られるが、細かく検討しようとするとき難しい点が出てくる。「人権」ということばひとつを取ってみても、会員間にイメージや理解の相違があるのではなかろうか。

人権を侵害した場合には、倫理綱領違反ということになり、「6. 本学会の会員がこの倫理綱領に違反したときには、日本催眠医学心理学会会則第8条第2項が適用される。」ことになる。ちなみに、会則第8条第2項は、「倫理的に不適当な行為があった場合、理事会はこれに対して警告し、もしくは除名を適用する」とある。

倫理綱領に違反するかどうかの判断は、専門的活動を行う際に会員自身にとって重大なことであるにもかかわらず、実際には、会員相互で共有できる「綱領の具体的な倫理基準」が明らかになっていない状況がある。ゆえに他学会では、倫理綱領の最後の条項で、「この綱領の具体的な倫理基準を別に定める」として別に設けているところもある。

倫理に関しては、あまり細かく規定すると窮屈になって倫理嫌いになるので、基本を示し会員の良識を信頼する方がかえってよいという考え方もある。倫理綱領の条項を解説するところの「倫理基準」を設ける必要があるかどうかについて、会員の皆様のお考えはいかがでしょうか。どうぞ倫理委員会までをご意見をお寄せ下さいませようお願い申し上げます。

資格認定委員会からのお願い

資格認定委員会 委員長
井上 忠典(東京成徳大学大学院)

資格認定委員会では、学会認定資格「催眠技能士」および「指導催眠技能士」の認定とその推進をおもな業務としていますが、その資格の名称について問題が生じたのでご報告させていただきます。

昨年8月下旬に学会事務局に厚生労働省職業能力開発局能力評価課の担当者より、「『技能士』の名称を使わないでほしい(変更してほしい)」という申し入れがありました。厚生労働省では、昭和34年より技能検定制度を実施しており、136職種がこの制度を利用して「〇〇技能士」という国家

資格を認定しているそうです。それは名称独占の資格であり、違反者には罰則規定もあるそうです。このような厚生労働省の申し入れに対して、常任理事会・理事会で検討した結果、永年慣れ親しんできた「催眠技能士」の名称に愛着はあるものの、厚生労働省の申し入れを受け入れざるを得ないと判断し、名称を変更する方向で検討を進めることになりました。

そこで、学会認定資格の新しい名称について、有資格者だけでなく、広く会員の皆様からご意見を募り、最終的には来年の大会時に開催する総会で決定したいと考えています。是非、会員の皆様のご意見をお寄せください。

また、委員会では、学会認定資格をより多くの会員の皆様に取得していただきたいと考えています。基礎資格(従来の催眠技能士)を申請するために必要な要件には、正会員になって3年以上、大会への参加等の研究実績、理論10時間・実技20時間の研修実績などがあります。近年、催眠技能研修会への参加者が増えていますし、すでに資格取得要件を満たしている会員の方もいらっしゃると思います。資格取得をお考えいただけると幸いです。ご不明な点がございましたら、下記のところまでお気軽にお問い合わせください。

<資格名称案および資格取得についての連絡・

問い合わせ先：井上忠典 t=inoue@tsu.ac.jp>

応用記憶認知学会

(SARMAC: The Society for Applied Research in Memory and Cognition)

第8回大会開催のご案内

SARMACの第8回大会が2009年7月26日～30日に京都平安会館で開催されます。SARMACは記憶や認知分野の基礎研究と応用研究をつなぐ研究を促進するために作られた国際学会で、公式ジャーナルとしてApplied Cognitive Psychologyを発行しています。大会は2年おきに開催されており、記憶・認知の応用研究、および直接は応用研究でなくても、関連しそうな記憶認知研究が多数発表されています。参加人数は約200人程度で、国内外の研究者とintimateなディスカッションが可能という特徴がある学会です。記憶・認知研究は、例えば、偽りの記憶をめぐる問題など、催眠とも関わり深い分野です。関心のある方は以下のホームページを参照の上、ぜひご参加ください。

大会ホームページ <http://sarmackyoto.org>
SARMACホームページ <http://www.sarmac.org/>

催眠臨床アラカルト～私の催眠風景

松原 慎 (新日鐵八幡記念病院)

早いもので催眠に出会って干支が一周過ぎている。私が催眠に出会ったのは医学部5年生の時。武藤安隆氏の催眠術完全マニュアルである。正確に言えば、その前にも、藤本正男氏の催眠術入門を小学生の頃読んだことはあるのだが、本格的に出会ったのは医学部の時と言えよう。

数学者志望だったが、才能を見切ってしまうていたし、性格的にも役人やサラリーマンはととても無理。おまけに、実家は真宗の寺院である。それもそれ、かつては伊勢長島の一方向一揆で織田信長配下滝川一益に焼き討ちされたというから、筋金入りの反骨家系である。

先祖は本願寺でも働いた高僧もいたようだが、今では落ちぶれて、親父は私を私学にやるのに学習塾を経営していた始末である。郡部に帝大を出た人が、学校教員以外には親父くらいしかいないという大変な田舎であったから成り立ってはいないものの、晩酌してから講義に行き、気に入らなると生徒を怒鳴り倒す。よくもまあ、そんな態度で経営が成り立ったものであるが、とにかく私はそのお金で学校にやってもらった。

そんな生活だったから、当然、坊主になるのは嫌で、親父から早く独立したいと選んで医学部に行ったわけである。

もちろん、そんな邪な考えばかりではなく、僧は人の心を救う仕事であり、医者も命を救う仕事である。科学に基づいて宗教に偏らず救済が出来る仕事、という表向きの理由も、本音である。

というのも、父は仏に帰依しながら、全く救いがたい人間だったからである。念仏を唱えて浄土にいけるのは良いが、日常生活では家族は良い迷惑である。南無阿弥陀仏といえば、孫悟空の金箍児(金の輪)のように効いて、父の暴言が収まるわけではないのだ。そういう冷めた目で見ていたから、宗教は生活を豊かにする智慧ではあるが、実践を伴わなければ絵に描いた餅になってしまうと思ったし、また、手応えのある救済を行うためには最新科学や知識を用いた方が良さだろうとも思った。医療や心理の救済においては、いかなる宗教の人であっても手をさしのべることが出来る。全ての人に救済を、というのは父の言葉で言えば如来の本願ということになるのだし、本質的なことを受け継いでいれば、まあ良かろう、と思っていた。

さて、暴露趣味的な話になってしまったが、そんな私が催眠に出会って、人生大きく変わってしまった。その完全マニュアルは、今でこそ微笑ましいのだが、当時は、オー

ル写真入りでその意味で画期的な本だった。私は早速その先生に弟子入りを願い出て、東京に通い詰めたのであった。月謝だけで30万円も取られてしまった。もちろん、東京への交通宿泊費は別である。習ったことを一夜でマスターしていく勢いで暗示文を必死で覚えた。

今は松木先生の研修会で悪役古典催眠レスラーとして登場する以外に、使う場面が殆どないが、古典催眠の暗示文をあまねく暗唱していたセラピストは当時であってもそういなかっただろうし、私自身、これはこれで貴重な財産だと感じている。

武道でもスポーツでもそうだが、訳がわからなくても自然に体が動くまで暗唱するのは大事なことなのだ。今の催眠研修に必要なのは、受講者側が必死で暗唱してくる部分かもしれない。こういう部分はいかに講師ががんばっても、お客さん気分の受講生にはそれを強要できず、教える側は困るのである。

催眠をマスターした気になった私は、これを活用すべく就職先を探してみたものの、母校三重大学には心療内科はない上に、精神科も普通に精神病を扱っている模様で、催眠という訳のわからぬツールを持ち出す危険分子を飼ってくれそうな雰囲気はなかった。調べていくと池見西次郎と成瀬悟策という二人の巨人がいずれも九大にいたことが判った。本人に弟子入りは無理でも、そういう土壤のある土地に違いないと思い、400年間三重から出ていない松原家の長子はここで九州に渡った。早速、九大心療内科の見学に行き、久保千春先生に出会った時に、これぞ一生ついて行く漢(おとこ)よ、と男惚れに惚れたのを覚えている。

今風に言えば、直江兼続が上杉謙信・景勝に惚れたときであろう。

久保先生の決め台詞は今でもはっきり覚えている。

「催眠か。今はやっている人はいないが、一生懸命やりなさい。一生懸命やったなら、失敗しても僕が責任を取るから。ぜひ、入局してやりなさい。」

秘書がやりました、という言葉が流行するご時世、失敗したら研修医が勝手にやりました、指導医の指導不足です、というのが当たり前なのである。大学病院の教授がなんとという度量であろうか。こんな人物がいたのである。当然私はそのまま入局した。その後、久保先生が医局員からだけでなく九大全体や社会からも信望篤く、世界心身医学会では天皇陛下をご招待してご進講申し上げ、九大病院の院長になられたことは周知のことである。

救急医療と心療内科の初期研修を終えてようやく、臨床で催眠を始めるのだが、最初の患者はつねって内出血

させてしまい、またその怪我の功名で治ってくれたりして、どたばたした治療をしていた。本学会にデビューしたのはその頃で、確か別府の大分大会である。

偉い先生が温泉に30回も入って一般口演を聞こうともせず、また、学会もそれを容認していた。

かつて緊急救命室で働いた私である。そんな体たらくを許すことは出来ず、何を発言したか忘れたが総会で火を噴いた。今でも覚えているのは、その後も著名な先生を含めて、私が学会の現状を真剣に憂いている気持ちに対して、温かい声をたくさん掛けて頂いたことである。

不思議なもので、私は攻撃的な部分を見せる時に、批判も受けるが支持者も同時に出るのである。

これは私が常に、上層批判をする時に、全体のためになるか、正しい方向であるのか、という義を大切にしていることが理解されているのかもしれない。

学会のニューズレターに一向一揆的なことばかり書くと受理されないかもしれないので、その辺は、色んな方と建設的に議論していくことに置いておく。いずれにせよ本学会は、養老院だと思われぬように若いニーズにもしっかり応えていくことが必要だろう。

さて、前半からライフレビューを書いていたのだがこのまま筆を置くと落ちがつかないのでもう少し書かせて頂く。

私の九州への旅は、ドラ親父に愛想を尽かした息子の良いパパ捜しの旅である。

学術の父は久保先生。また、松原つながりで、自称隠し子と言わせて頂いているのが松原秀樹先生である。本人によればこんな目立ち隠し子にならないだろう？というのだが。

そして、催眠の師匠は松木繁先生である。(中島央先生は父と言うには歳が近いので兄貴か悪友と言える)。

最近学会研修では飽きたらず、個人(正確に言うと少人数グループの)レッスンを受けている。2-3ヶ月に1回である。相棒は上手幸治さんと、吉村隆之さんである。いずれも180cm前後の大男と言えよう。この3名がお互いに催眠をかけ、松木師匠独特の共有空間だのギフトだの裏のメッセージなどを仕込まれる。

ピアノの発表会で間違えずに弾けたことのない私は常に緊張し、いつもへまをしてばかりだったが、ようやく慣れたのと技術の向上も感じられるようになった。そして迎えた昨年12月。

関東から二人の女性セラピストが被験者参加し(彼女たちは午前中にレッスンを受けていた)5名での会だった。

私は上手さんの(疑似)家族催眠中に被験者としてとうとう固まってしまった。彼の名誉のために言えば、上手

さんの催眠は、我々中堅世代では、最もお上手だと言って間違いない。しかし、その日は家族催眠という難しい課題のこともあり、私は置きざられて固まった。

そこでやおら松木師匠が登場。ところが、これが全然解除できない。師匠も頭に血が上ってしまって、実の息子をひっぱたかんばかりの勢いだし、私はコートのフードを目深に被って緘黙児のようになる始末。松木・松原のちょっとした「松の劇場」と言ったところである。父子葛藤が再燃していたのは松木先生の方だったのかもしれない。

ある程度は覚めかけてきたので、師匠にダメ出しした後、半催眠状態の私自身が上手さんに助言しながら共同作業をしてようやく戻ってこることが出来た。極めて面白い体験であった。

研修を終えた時に、吉村さんに「険がとれましたね」と言われたのが印象的だった。

その後、どういう訳だか、松木先生や吉村さんの方が、積極的・男性的となって、私は至極穏やかである。父子葛藤は伝染するものらしい。

かくて、私は実の父と出来なかったことを師匠と出来た訳である。つまり、ともに催眠という一つの理想型を追い求め、議論し、どつきあい？、冗談を言い、飯を食い、酒を飲む。東日本催眠研でも一般参加者として大人しく隠れていたのに結局、コメントさせられてしまった。ここまで来るとあうんの呼吸としか言いようがない。

父子葛藤は、誰にとっても大きなテーマである。松木先生ご自身にもそれはあり、幸いにお父様はご存命と聞く。父も息子もある男にとって、父子葛藤は何を教えてくれるのであろうか。恩師に言うのもおこがましいが、孝行したい時に親はなしとはよく言ったものである。

先に名をあげた色んな方々のお力を頂きながら、私のモーニングワークは一区切りを迎えた。

往生した父は、そんな私が、真の師や友を得て成長していく姿を、きっと喜んでくれるであろう。

そして、自我がようやく安定してきた私は、これまで学んできたことを、若い世代にも伝えるべく、役割を自覚し始めた。

催眠のどこまで行けども深く素晴らしい魅力。

それを伝えるために、催眠バカー一代は伝道師となっていく。旅の仲間の話は、また、次回。

研究会紹介

このコーナーでは、全国各地で行われている地方単位の研究会を紹介します。掲載を希望される研究会は編集までご一報ください。

鹿児島臨床催眠研究会

鹿児島臨床催眠研究会は、鹿児島の地で臨床催眠を学ぶ機会をより多く提供することを目的として平成19年4月に発足しました。現在、隔月の定例勉強会（臨床催眠を学ぶ会）と年一回の研修大会を主な活動としています。

第1回研修会として、平成20年3月に鹿児島大学にて開催したところ、初級・中級を合わせて63名に上る参加者があり、多くの先生方の協力により好評の内に終了することができました。また、第2回研修大会は平成21年3月1日（日）に、前回と同じく初級・中級コースを鹿児島大学で開催し、全国各地からいらっしやった64名の参加者の皆様とともに無事終了いたしました。研修会を開催するたび、遠方からもご参加いただけることに、世話人一同臨床催眠に懸ける熱い想いを受け止めている次第です。

まだまだ誕生したばかりの研究会ですが、鹿児島の地で臨床催眠が根付き、より多くの方が正しい臨床催眠に触れ実践していけるよう、基礎を中心とした研修会を講師に依頼して研鑽を重ねている日々です。

今後とも、研修大会開催の際は、皆様のご参加をお待ちいたしております。

東日本催眠療法研究会

平成21年1月11日12日の両日、東京医科歯科大学にて松木繁先生を講師にお迎えし、東日本催眠療法研究会第一回技法研修会を行い、初級51名、中級43名の参加を頂きました。初級は総論の講義、Chevreulの振り子、後倒法、腕降下、腕の開閉のデモ、実習、腕浮揚のデモ、全体討論。中級は、催眠の臨床適用のコツ・「観察」と「ペーシング」の実際、腕浮揚の実習、utilizationの実習、三人同時催眠のデモンストレーションなど中身の濃い研修会となり、おかげで好評を頂きほっとしております。東催研立ち上げの目標は「臨床で催眠を使えるようになる」でしょうか、気軽だけれどもしっかり基本から身につけて行ければと考えております。催眠療法の応用範囲も広がりを見せており、現在は歯科領域からも参加がありました。

第2回は松原秀樹先生を5月9日10日に、第3回は中島央先生を夏頃東京医科歯科大学にお迎えし行います。皆様のご参加をお待ちしております。

連絡先：東日本催眠療法研究会事務局

tousaikenn@gmail.com

まだ調整中ですがHPもあります。

<http://tousaikenn.web.fc2.com/>

////// 編集後記 //////////////////////////////////////

楽しかったいわきの大会も終わり、早いもので季節は春になりました。本来ならこのニューズレターをもっと早くお届けするはずでしたが、編集が大幅に遅れてしまったことをお詫び申し上げます。

今号から新しい企画としてエッセイを載せています。筆者の松原先生には新進気鋭の催眠療法家としてご自身の臨床観を語っていただきました。このコーナーの執筆は今回は編集局から指名させていただきましたが、ここで何か書いてみたいという皆様は、どうぞ奮って編集局までご投稿ください。よろしく願いいたします。またニューズレター全体に関するご意見ご感想もお待ちしています。

それでは、また次号ということで。（編集担当 中島 央）
